

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：32611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00220

研究課題名（和文）コミュニティ音楽療法の包摂と排除 - 生態学的視点からの事例検討による多層的理解

研究課題名（英文）Inclusion and exclusion in community music therapy - multi-layered understanding through case studies from an ecological perspective

研究代表者

三宅 博子（Miyake, Hiroko）

国立音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：40599437

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、障害のある青年との個人音楽療法および地域交流拠点における参加型音楽活動というふたつのコミュニティ音楽療法の実践事例について、背景や価値観が異なる参加者の相互変容を生態学的な視座から検討し、音楽活動の過程で生じる包摂と排除の相互の様相を明らかにしようとするものである。実践事例の検討を通じて、相手と自分がそれぞれどのような経験世界を生きてどのように音楽を体験しているのに関心に向け、異なる経験世界を生きる人々がどのように一緒に音楽を立ち上げていくことができるかという共にあろうとする実践の視座へと向かうことで、新たな関係性や場が開けてくることが推察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通して、音楽活動のミクロな場面で起きる参加者の相互変容が、障害者の社会参加というマクロな課題へと向かう経緯を、実践的に辿ることができた。参加へと向かう過程のなかに包摂と排除の様々なダイナミクスが働いていることや、参加の過程で創られる新しい活動や場や人間関係が排除と包摂の様相を常に流動化し、個人と社会との相互変容の源となることが確認された。

研究成果の概要（英文）：This study examines the mutual transformation of participants with different backgrounds and values from an ecological perspective in two community music therapy practices - individual music therapy with disabled adolescent and participatory music activities at a local community house. This is an attempt to clarify the mutual aspects of inclusion and exclusion that occur in the process of musical activity. Through this research, we were able to practically trace how the mutual transformation of participants that takes place in the micro-situation of musical activity moves towards the macro issue of the social participation of disabled people. It was confirmed that various dynamics of inclusion and exclusion are at work in the process of participation, and that the new activities, places and relationships created in this process constantly fluidise the aspects of exclusion and inclusion and become a source of mutual transformation between the individual and society.

研究分野：音楽療法

キーワード：コミュニティ音楽療法 包摂と排除 参加 音楽による共創

1. 研究開始当初の背景

コミュニティ音楽療法の、個人の病理に焦点を当てる治療を超えて、個人を取り巻く人々や社会、文化との関係の変容を目指す、音楽療法の実践と考え方である。2000年代前半にヨーロッパを中心に国際的に議論されるようになり、現在では音楽療法の重要な領域の一つとして世界各地で実践、研究が行われている。申請者は、音楽療法士として、障害者、神経難病者、高齢者、地域コミュニティの人々などを対象とする音楽活動に携わりながら、コミュニティ音楽療法の知見を参照し、病者・障害者の生のあり方と音楽活動の関わりについて、実践と理論の両面から考察することを課題としてきた。

コミュニティ音楽療法では、病や障害、高齢、移民等による社会的孤立や排除を問題とし、音楽活動への参加を通じて対象者を社会の一員として包摂することを推進してきた。しかし、ここには課題がある。先行研究では、個人と社会との関係変化の指標として対象者の社会参加や音楽文化への参加が強調されている一方で、立場や背景、価値観の異なる参加者どうしが音楽活動を通じて変化させた関係には十分な関心が向けられていない。その背景には、文化芸術に備わる特性を活かして就労以外の社会参加の機会を提供するという、コミュニティ音楽療法に期待される社会的役割があるだろう。だが、音楽活動に参加する機会が提供されたとしても、それ自体は包摂への入り口に立つことにすぎないし、現状の社会や音楽文化の側に対象者を「組み込む」形になってしまう可能性もある。

申請者はこれまでの研究で、包摂と排除のダイナミクスを捉える事象として、音楽活動の過程で起こる参加者間の差異や衝突の経験に着目し、音楽形態との連関から複数の事例を検討した。結果、参加者ごとに異なる参加の目的や意義に応じ、療法士が活動の枠組みを柔軟に変化させていくことで、多様な参加のあり方を含み込む場が生じることがわかった。また、音楽活動を通じて知覚される対象者・療法士の感覚的差異を内省的に検討することで、対象者を「障害によって孤立状態にある者」から「独自の経験世界とコミュニケーション様態を持つ存在」へと捉え直し、互いの資源を生かした音楽形態が作られることがわかった。

以上から推察されるのは、参加者間の差異の経験を反映して新たな音楽形態を創出する過程で、参加者が互いに包摂し合う「相互包摂」が起こっているのではないかということだ。この、相互包摂の生成過程を明らかにするためには、音楽活動の参加者間で生じる包摂と排除の動態的な様相を、ミクロな活動場面からマクロな社会構造に及ぶ生態学的多層性のもとで、多角的に検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、個人ないし地域交流拠点におけるコミュニティ音楽療法の実践事例について、背景や価値観が異なる参加者の相互変容を生態学的な視座から検討し、音楽活動の過程で生じる包摂と排除の相互的な様相を明らかにすることを目的とした。とくに、実際の音楽活動場面でどのような包摂と排除のダイナミクスが働いているのか、包摂/排除は誰の視点によるものか、それは参加者の立場によって変わるのではないかといった論点から、事例を多角的に検討することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、申請者による以下ふたつの音楽活動について、活動の企画実施・参与観察・映像や文章による記録を行い、コミュニティ音楽療法の知見を参照して質的に検討する。

(1) 障害のある青年との個人音楽療法の事例

身体・知的・視覚障害を併せ持つ青年を対象とする音楽療法の事例。対象者と療法士を「異なる身体性や文化音楽的価値観を持つ者どうし」と捉え、互いの経験世界の違いを探りながら協働して音楽作りを行う過程に着目する。

(2) 地域の交流拠点での音楽活動の事例

東京都内にある地域の交流拠点における参加型音楽活動の事例。音楽活動の場を「そこに居合わせた多様な人々が環境と相互作用しながら協働的に作り出す場」と捉え、参加者どうしの関係の生成・変容の過程と、異なる音楽的価値観や技術を含み込む活動形態との連関に着目する。

以上を合わせて、多様な人々の協働によって作られる音楽活動の相互包摂的な性質と形成過程を明らかにし、その音楽療法的な意義について考察する。

4. 研究成果

ふたつの事例についてそれぞれ実践と検討を進めていたが、2020年の新型コロナウイルス感染拡大の影響により、活動の中断や方向性の変更を余儀なくされた。結果的に、予期しない社会状況の変化が障害のある人を含む多様な人々の社会生活に大きな影響を及ぼすことを実感するとともに、本研究の方向性を明確にする機会となった。とくに当初の予定から大きく変わったのは、新しい音楽活動を立ち上げたことである。以下、事例ごとに研究の経過と結果を述べる。

(1)障害のある青年との個人音楽療法の事例

2018年度25回、2019年度8回の個人音楽療法セッションを行い、即興演奏場面の映像記録からふるまい・発音・発語を観察して微視的な分析を行った。結果、対象者によって持ち込まれた短いモチーフを用いて音楽的やりとりをする過程で、対象者と療法士相互の知覚・認識・経験・行為が交換され、それらの異質な要素が音楽的要素として組み込まれるときに、ひとつの生き生きとした音楽の様相が生じることがわかってきた。本研究では、この一連の過程を音楽による共創現象として捉え、対象者・療法士という役割関係の質が変容したり個と個の関係が結び直されたりする契機と推察した。この成果を、2020年の共創学会第4回大会で発表した。また、書籍『Socio cultural Identities in Music Therapy』の担当章および日本臨床音楽療法学会誌への寄稿文にて、成果の一端を公開した。

本事例の実践過程で、研究代表者は「背景や価値観の違う対象者と療法士と一緒に音楽するとはどういうことか」という問いを抱いた。この問いを事例に直接関わりのない人とも共有したいと考え、哲学カフェという手法を用いた対話のイベントを行った。このことは、臨床実践の現場とそれを取り巻くコミュニティをつなぎ、事例を社会にひらいていく試みのひとつになったと考える。この成果を、Voices: A World Forum for Music Therapy誌で「音楽の中で共にいること: 哲学カフェでの対話を通じた一考察」として、英語・日本語で公開した。

(2)地域の交流拠点での音楽活動の事例

2018年度に5回、2019年度に3回の音楽活動を行った。また、これまでの活動を記録した短い映像作品を製作し、交流拠点での上映と対話を行った。以上をもとに、音楽活動場面における参加者の相互行為の分析および共同創作した歌の検討を行った。結果、活動への参加の過程で生じる相互触発を通し、多様な個の存在からなるコミュニティの一員として「生かされている」感覚を確認・促進することが、コミュニティのエンパワーメントにつながることを推察した。以上の成果を、第16回世界音楽療法大会で発表した。また、書籍『Socio cultural Identities in Music Therapy』の一章を分担執筆し、成果の一端を記述した。

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大によりこれまでのような活動が難しくなったため、オンラインによる活動、屋外や縁側を用いた活動を模索した。活動再開の際に参加者のニーズを把握することが難しかったことから、地域とのつながりを保って活動することの重要性を痛感した。2020~22年度は計5回の活動にとどまったものの、これまでの参加者が企画実施を担うようになってきた(2023年度より本活動の代表となる)、別の参加者が同拠点で自らの企画した音楽活動を立ち上げるなど、本活動が発展的に継承されることになった。

(3)知的障害者とその家族、地域の人を含む参加者による音楽クラブ活動

(1)の事例の実践過程で、障害者の社会参加という課題に直面した。対象者の特別支援高等学校卒業を機に、発達促進を目的とする個人音楽療法セッションから、日常生活の充実や社会参加を目的とする地域音楽活動への移行を目指した。しかし、対象者の障害特性をも独自の表現として生かすような音楽活動を継続できる場所は、対象者の生活圏内では見つからなかった。そこで、2019年度に地域の音楽交流スペースで新たな音楽活動を立ち上げ、知的障害当事者と家族、教育や福祉等の支援職、地域住民、音楽療法士を含む十数名のメンバーで、隔月1回の定期ワークショップを計23回実施した。現在、ワークショップは参加者にとって余暇活動の一つとして定着し、日常生活での肩書きや役割をいったん脇に置いて一緒に音楽作りを行う関係性が育まれている。2022年度には主体的な活動参加や参加者の関係の相互的变化が見られ、2023年度より参加者との協働による研究の開始へとつながった。本活動の一端を、日本臨床音楽療法学会誌への寄稿文に掲載した。

(1)~(3)の実践事例研究を通して得られた共通の問いは、「音楽活動を通じて多様な人々が共にあるとはどういうことか」であった。実践の過程では、対象者を理解することが難しいと感じられたり、一緒に音楽活動をするに難しさを抱えることがある。そのことが、療法士と対象者、あるいは参加者とそれととりまく社会や文化との不均衡な関係性に由来する場合がある。その際に、相手と自分がそれぞれどのような経験世界を生きてどのように音楽を体験しているのかに関心を向け、異なる経験世界を生きる人々がどのように一緒に音楽を立ち上げていくことができるかという共にあろうとする実践の視座へと向かうことで、新たな関係性や場が開けてくると推察される。

(1)~(3)の実践事例研究と並行して、共感、協働、共在、共創などのキーワードを検討し、音楽活動の過程で生じる包摂と排除の様相を相互的・動的に捉え得る理論的視座の明確化に努めた。また、研究代表者が共同主宰する「ここのわ音楽臨床研究対話会」での音楽療法研究者・実践者との議論を通じて、実践場面と理論的視座との往還を目指した。この作業は現在も継続中だが、包摂と排除の様相を捉え得る視座として、音楽による共創という考えに至った。ここでいう共創とは、「複数の人やものごとが互いに交わり、折り合いをつけるなかから、新しいものごとが生まれるという現象」(諏訪, 2019)に近い。ここでは、対象者と療法士とを含む参加者が音楽活動を通じて相互に変容し、新たな社会的=音楽的關係を結ぶことが目指される。

本研究を通して、音楽活動というミクロな場面で起きる参加者の相互変容が、障害者の社会参加というマクロな課題へと向かう経緯を、実践的に辿ることができた。参加へと向かう過程のな

かに包摂と排除の様々なダイナミクスが働いていることや、参加の過程で創られる新しい活動、場、人間関係が排除と包摂の様相を常に流動化し、個人と社会との相互変容の源となることが確認された。今後の課題として、この成果を引き続き書籍や論文としてまとめ、社会に発信することが求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 三宅博子	4. 巻 15
2. 論文標題 私の臨床における音楽を語る 共にあろうとする 実践の視座から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 臨床音楽療法	6. 最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko Miyake	4. 巻 22(1)
2. 論文標題 Being Together in Music: Thoughts From a Philosophy Cafe Dialogue(日本語標題「音楽の中で共にいること：哲学カフェでの対話を通じた一考察」)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Voices: A World Forum for Music Therapy	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15845/voices.v22i1.2635	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 7件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小柳玲子、伊藤孝子、植木亜弓、三宅博子、井上勢津
2. 発表標題 コミュニティ音楽療法について考える ～私たちは「コミュニティ」と「音楽」と「療法」をどう捉えているのか
3. 学会等名 第22回日本音楽療法学会学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三宅博子
2. 発表標題 ケアとアート～音楽療法を手がかりに
3. 学会等名 第87回身心変容技法研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 生野里花、三宅博子、布施葉子、伊藤孝子、Simon Gilbertson
2. 発表標題 臨床で出会う「研究のたね」の育てかた - このわ音楽臨床研究対話会の試みから
3. 学会等名 第21回日本音楽療法学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三宅博子
2. 発表標題 臨床音楽とは何か 私の臨床における音楽を語る
3. 学会等名 日本臨床音楽療法学会 第15回大会・日本臨床音楽研究会 第13回年次集会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hi roko Miyake
2. 発表標題 Mutual Empowerment Process: Valuing Each Individual 'Being' in a Communal Music Activity (Spotlight Session: Access and Empowerment)
3. 学会等名 16th World Congress of Music Therapy (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三宅博子
2. 発表標題 重度重複障害のある青年との音楽療法場面の質的分析の試み 二人称的関わりの視点から
3. 学会等名 共創学会第4回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三宅博子
2. 発表標題 地域の居場所と アート(音楽)のかかわり
3. 学会等名 おとむすびトークショー「地域をつなぐ音楽の話」vol.1-地域の人たちが地元で居場所を持つこと、そのために音楽ができることー(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三宅博子
2. 発表標題 2020世界音楽療法大会 (南アフリカ)の報告
3. 学会等名 第351回日本音楽心理学音楽療法懇話会講習会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三宅博子
2. 発表標題 コミュニティのつながりを問い直す - 共に あるとはどういうこと?
3. 学会等名 日本音楽療法学会東北支部学術大会講習会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三宅博子
2. 発表標題 地域と「ともに」へ向けて 東京都内の地域交流拠点での音楽実践から
3. 学会等名 第18回日本音楽療法学会関東支部地方大会(神奈川)シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三宅博子
2. 発表標題 人文社会科学的視点を介した臨床と研究の往復
3. 学会等名 第19回日本音楽療法学会学術大会 自主シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤孝子、杉田正夫、柴田朋子、青木真理、三宅博子
2. 発表標題 ノルウェーの音楽療法から考える、日本のコミュニティにおける音楽療法の展望
3. 学会等名 第18回日本音楽療法学会学術大会自主シンポジウム
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Hiroko Miyake	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Barcelona Publishers	5. 総ページ数 17
3. 書名 Making a Detour: Paths for Diverse People to Live in Diverse Ways, in Sociocultural Identities in Music Therapy	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>芝の家・音あそび実験室 http://otoasobilab.starfree.jp/</p> <p>世界音楽療法連盟(WFMT)リサーチインタビュー https://youtu.be/FuJHe9zm8hc</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------